

Ⅲ. 大学教育学会研修報告

A. 平成 20 年度 FD 研修会参加：大学教育学会 第 30 回（2008 年）大会の参加

FD に関する最新の情報と教育的活用事例にふれ、今後に活用していくため、三熊委員と小西委員長が上記の学会に参加した。東京の目白大学新宿キャンパスにおいて、以下の通り 2 日間にわたって開催されたこの学会について報告する。

大学教育学会 第 30 回（2008 年）大会

日時：2008 年 6 月 7 日（土）～8 日（日）

会場：目白大学新宿キャンパス 10 号館・佐藤重遠記念館

B. テーマ：大学の「教育力」

1. 趣旨（大学教育学会ホームページより抜粋）

今日、小学校・中学校・高等学校における教科の見直しなどの教育改革が進行する中で、大学も教育機関としての機能を充実させる必要性が指摘されております。1991 年の大学設置基準改正から 17 年、大学進学者が四割を超える現状の中で、各大学が様々な教育改革に取り組んでいる様子は、多くの研究・研修の場で伺い知ることができます。

例えば、シラバスの公開や学生による授業評価の導入、GPA 制度の活用、登録単位数の制限、授業内容や授業方法の改善など、様々な取り組みが導入され、点検・評価のプロセスを通して見直され、改善されて行く様子、FD 活動を通してその教育改革の取り組みが浸透していく様子を各大学における教育改革の取り組みの中に垣間見ることができます。

さて、その取り組みの多くは、当面の問題を解決するための具体的な対応策という点では、一定の効果を発揮していると評価することができます。その一方で、当面の問題を解決に迫られることにより、その取り組みの背景にある、大学という高等教育機関が果たすべき役割は何かという本質的な問題に対する意識が希薄化していくならば、その改革の方向を見失うことにもなりかねないと懸念いたします。私たち大学人は、このような時期であるからこそ、初等中等教育の改革論議にとらわれることなく、しっかりと時間をかけて、大学という高等教育機関が果たすべき役割は何かという本質的な問題を論議する必要があるのではないか、また、そのことは日々の教育改革に前向きに取り組むためにも重要なことではないかと考えます。

このような現状認識に立った上で、大学教育の果たすべき機能を、ここでは、大学の「教育力」と呼び、大衆化し、かつてのような知的エリートや研究者の育成だけが期待されるのではない、今日の大学の教育機能について議論を深めたいという意図から、「大学の「教育力」」という総合テーマの下に本質的論議を行うシンポジウムⅠを企画しました。また、学生を育て社会に送り出すためには、授業をとおした教育・研究という側面からだけでなく、学生の学園生活全般についての様々な関わりが不可欠です。その意味から、大学職員の関わりも、大学における「教育力」について検討する上で、大変重要な要素となってきたと考え、職員の関わりも含んだ教育改革の具体的取り組みの事例から「大学の「教育力」」について考えるシンポジウムⅡを企画しました。活発な論議を期待しております。

C. 大会スケジュール

第1日タイムテーブル	
9:00～	受付
9:30～12:00	ラウンドテーブル
12:00～12:50	昼食
13:00～13:50	総会 議長：寺崎昌男(会長)
14:00～14:20	学長挨拶 目白大学学長 佐藤弘毅
14:20～15:20	基調講演 「学士課程教育の在り方の審議経過にみられる大学の「教育力」(仮題)」 講師：佐藤弘毅(目白大学学長) 司会：竹前文夫(目白大学・本大会実行委員長)
15:30～18:00	シンポジウム I 「大学の「教育力」とは何か」 シンポジスト：金子元久氏(東京大学大学院)、新村洋史氏(中京女子大学)、徳永哲也氏(長野大学) 司会：松岡信之(国際基督教大学・本大会企画委員)
第2日タイムテーブル	
8:30～	受付
9:00～12:00	自由研究発表
12:00～12:50	昼食
13:00～16:00	シンポジウム II 「大学における「教育力」を考える—教員と職員のコラボレーションの視点から—」シンポジスト：浅野昭人氏(立命館大学)、今田晶子氏(立教大学)、長野佳恵氏(目白大学) 本郷優紀子氏(桜美林大学・本大会企画委員) 司会：佐々木一也(立教大学・本大会企画委員)
16:00～16:30	会長閉会挨拶・次期会場校挨拶

D. 委員が参加したシンポジウム及び部会等の報告

a. 1日目

9:30～12:00

ラウンドテーブル

テーブルVI：「大学全入時代のFD——FDを楽しむ」(小西)

近年、大学にはさまざまな学生が入学し、授業についていけない学生や授業に参加しない学生が多く見られるようになった。これに伴い大学はさまざまな学生を想定するとともに、授業の改善を目指していかなければならない。また、各教員においては自助努力によって、授業案や運営上のテクニックを創出していかなくてはならない。さらに学生からの評価を受け、振り返ることはすでに必須となっている。以上のことはFDの一端ではあるものの、現状として多くの大学が共通して実施していることでもある。

このテーブルでは、圓月勝博氏(同志社大学)、木野茂氏(立命館大学)、橋本勝氏(岡山大学)が具体的に所属組織におけるFD活動を報告した。その中で、圓月氏は「FD活動(Faculty Development: 大学教員の教育改善)」という用語や理念は浸透したものの、実践面においてはどこまで進んだのかを確認していなかったり、将来どのような教育活動を行うのかを示していなかったりする教育機関が多い。結果、FD活動に携わっておられる先生は疲れ果て、あるいは真の意味でのFD活動実践が広まらない。各大学で成果を確認して、PDCAサイクル(Plan、

Do、Check、Act：計画、実行、確認、行動）を確立させるべきだ」と大学におけるFDの実情を吐露した。また、読売新聞生活情報部で大学教育に関するルポを掲載している松本美奈氏は、「大学にアンケート調査を実施した。4月下旬に各大学の学長宛に発送し、5月下旬をしめ切りとした。しかし、いくつもの大学からなかなか返事がない。気になって電話をかけると、『そんなものは届いていない』という答えだった。このことから、組織としての機能が弱い大学も相当数あり、努力している先生の苦労が無駄になる。新聞社としては大学を応援したいのに、残念だ」と、大学教職員ではない立場からみた大学のFD改革をやや批判的に報告した。どの報告も、FD活動には具体的にどのような可能性と制約があるのかを論じており、今後のFDの推進に向けて意義深いものであった。

13:00～15:00

基調講演「学士課程教育の在り方の審議経過にみられる大学の「教育力」」（小西）

講師：佐藤弘毅氏（目白大学学長） 司会：竹前文夫氏（目白大学・本大会実行委員長）

大学の『教育力』を考える3つの視点

講師が中教審の大学分科会の委員を経験したことから、「学士課程教育の構築」の試み、大学設置基準の緩和による光と影、教育研究を支える組織経営についての話があった。現在の大学を取り巻く環境や、今後各大学がどのように個性を開花させながら日本の高等教育に貢献していくべきかなどについての貴重な話があった。特に、大学設置基準の緩和による光と影では、設置申請における実際の事例が紹介された。中には、驚くべき実態が示されるようなものもあった。

15:30～18:00

シンポジウムⅠ：『大学の「教育力」とは何か』（三熊・小西）

シンポジスト：金子元久氏（東京大学大学院）、新村洋史氏（中京女子大学）、徳永哲也氏（長野大学）

2007年度の文部科学省のデータによれば、大学・短期大学への進学率は54%となっている。このような高等教育のユニバーサル化の流れの中で、多様な学生に対応するために大学の個性化・特色化が進行してきている。また、一方では我が国の大学が、世界の大学と伍していくためには、大学での学びの内容を保障し、学位の国際的な通用性を確保する必要性も指摘されている。このように多様な課題を抱える大学であるが、目先の問題に流されることなく、「大学とは何か」、「大学の社会的使命は…」、「どのような教育（教育力）が必要なのか」といった問題意識を忘れてはならないであろう。2007年9月に「中央教育審議会大学分科会学士課程教育の在り方に関する小委員会」から公表された「学士課程教育の再構築に向けて（審議経過報告）」では、大学は「何を教えるか」ではなく「何が理解できるようになるか」という「学びの成果」を明確に具体化する必要があることが強調されている。

このような流れを受け、今回のシンポジウムでは大学の「教育力」の内容をどのように考えるかを確認し、その教育力が具体的にどのような形で展開され、どのような「学びの成果」に結びつくのかを金子元久氏（東京大学大学院）が一般的な話題を盛り込みながら報告した。

「学びの成果」については、各学問領域で様々な目標が立てられるというのが現状であるが、専門課程の教育ではなく、教養教育という観点から学生の学びの充実に取り組まれている事例について、新村洋史氏（中京女子大学）と徳永哲也氏（長野大学）が発表した。いずれも、実際の授業をいかに工夫し、学生の興味関心を持続させているかについて具体的なものであり、また、参加者が共有することのできる内容のものであった。

b. 2 日目

9:30～12:00

自由研究Ⅳ：「授業評価・成績評価」（三熊）

1) 木野茂氏（立命館大学大学教育開発・支援センター）による研究発表、「授業アンケートに見るコミュニケーションの効果」

立命館大学では、授業評価の項目に「授業におけるコミュニケーション」を入れており、この項目はこれまであまり見られなかったものである。具体的には、1つ目に授業の各要素について、良かったことと改善してほしいことを問う設問に、コミュニケーションに関連するものを4つ入れたこと、2つ目は、授業に関する学生の声をどのような方法で集めているかについて問うたこと、3つ目はコミュニケーションを通じて得た授業に関する学生の声を授業に反映したかについて問うたことである。1つ目の結果は、他の全ての項目で教員と受講生の結果に差がなかったのと対照的に、4つのうち「受講生（教員）とのコミュニケーション」「教室内での質問のしやすさ」「教室外での質問のしやすさ」の3つにおいて、教員の努力に対し学生の満足度が見合うものではなかったことが明らかとなった。2つ目の結果は、ペーパーを用いて情報収集しているという教員の主張と、意見を聞かれていないと受講生の回答の間に乖離が見られた。3つ目では、質問には対応してくれなかったとする受講生の声が多いという結果が出たとのことであった。その他、ペーパーでの対応よりも、ピアサポートなどの直接のコミュニケーションの方が、学習時間の伸びに寄与しているとのことであった。

2) 田実潔氏（北星学園大学）による研究発表、「学生による授業評価と授業改善-学生評価の再分析から-」

この大学では、授業評価を隔年で実施している。実施により、各単年度における前期と後期の比較及び2003年度と2005年度の比較が可能となった。その結果、全ての平均得点が4.0以上と高得点であったにも関わらず、得点が有意に増加していることが明らかになった。但し、意欲が低下せず高い水準で推移しているにも関わらず授業への出席状況が有意に減少しているという不一致も検出された。この点については的確に分析されてはいない。また、成績の低かった教員群は2回目調査では評価点が上昇し、高評価群では下降していた。LOW群にはインセンティブとして効果があったようで、HIGH群には天井効果による統計上のタイプIエラーと解釈できる結果が出た。HIGH群のための新しい尺度や基準が必要かもしれない、とのことであった。

3) 舛本直文氏・串本剛氏（首都大学東京）による研究発表、「大学生の学習成果と満足度に及ぼす要因の分析：学生と教員の授業評価のズレに着目して」

学生の満足度だけでなく、学習成果との関連分析を取り入れることの重要性に鑑み、「シラ

バスに目標として掲げられている知識や能力を獲得できた（学生向け）」、「シラバスに目標として掲げられている知識や能力を獲得させることができた（教員向け）」という項目を追加して学生、教員双方に授業評価を行った。その結果、学生側からは満足度及び授業成果に関する要因として「教員の説明の分かりやすさ」という要因が大きく関与していることが分かった。また、教員側からは学生の態度やシラバス、評価基準の説明、適切な対応などが大きな要因として挙げられた。

本報告は本学における今年度の授業評価の課題である学習成果に関する項目の設定に大いに参考になる研究である。その他の評価項目に関しても、学生による授業評価（SE）に加えて教員自身によるほぼ同じ項目を用いた授業評価（TE）も実施して比較検討をしていることは画期的であった。

4) 南学氏（三重大学教育学部／高等教育創造開発センター）による研究発表、「興味深い授業と楽しい授業の授業満足度は異なるのか」

最も興味深かった科目と最も楽しかった科目を調査。同一科目を挙げたのは44.4%。「楽しい」条件は単位が取れたという回答が多く、内容とコミュニケーションで評価が高くなる。興味深い科目は履修中との回答が多いので、後期になってから学問の興味深さを見いだせるようになったのかもしれない。「楽しいこと」と「有益なこと」の折り合いをどうつけるのか、本学における課題にもなりうるだろう。

5) 西垣順子氏・矢部正之氏（大阪市立大学教育研究センター／信州大学全学教育機構）による研究発表、「成績評価の難易度と形成的評価が受講生の学習に与える影響2」

成績評価を厳しくすれば学習効果は上がるのか？厳しいことによる一定の効果はあるが、自習時間はのびないことがある。それらをふまえての調査報告であった。1年生は難しい授業の成果を低く評価する傾向がある。内容が基礎的なものが多く、「成果」を実感しづらいからか。また初年次は、大学で学びたいことが一度崩れる時期だからとも言える。形成的評価の効果は、「フィードバックがくる」ことによる情動面への効果が中心と考えられる。しかし、フィードバックを十分に見直している学生は多くないという現状も垣間見えるとのことであった。

6) 松塚ゆかり氏（一橋大学大学教育研究開発センター）による研究発表、「履修パスウェイとアウトプット指標で測る教育の成果」

教育の内容や質をアウトプットで測ろうとする試みをもとに、その成果に到達するまでの要因と経路（パスウェイ）を測定しようとする研究である。結局のところ、成績の善し悪しが進路を大きく左右しないことなどが示唆されていた。

7) 久保延恵氏・安岡高志氏（イワキ株式会社／立命館大学教育開発推進機構）による研究発表、「優秀教員（Teaching Award 受賞者）の共通点について」

東海大学で導入された Teaching Award の制度を追跡調査し、優秀とされた教員の特徴を共通点から指摘した研究。たとえ話や具体例を用いて説明する、概念やイメージを持たせるように努めるなど、教育学というよりはコミュニケーション論で議論されるような項目が挙げられていた。

自由研究VI：教育実践A（小西）

大学における FD 活動のためのテクニックや FD 活動と学力との相関関係などを検証した教育実践報告があった。

1) 山田剛史氏・森朋子氏（島根大学教育開発センター）による研究発表、「大学生の学習成果」

本報告では、これまで提起されている様々な学習成果指標から大学生の学習成果（ラーニング・アウトカム）に関する項目を吟味・選定し、卒業生調査データを基にその構造（要因）を抽出し、正課活動と正課外活動とでどのような効果の差異が見られたかについて報告があった。結果「社会的関係形成力」「持続的学習・社会参画力」「知識の体系的理解力」「自己主張力」の4因子が正課外で、「情報リテラシー」「外国語運用力」の2因子において正課が有意に高い効果を産出できた。どのような能力にどのような学習経験が有効かを丹念に見ていくこと、正課外を積極的に含んだ大学教育全体の中で、学生が多様な学習成果を効果的に獲得しうるような教育環境の整備は、本学でも考えなくてはならないテーマである。

2) 桐山聰氏（鳥取大学・大学教育総合センター）による研究発表、「学生の質問を促すプレゼンテーション方法の開発」

プレゼンテーションの場において、聴衆である学生からの的を射た質問が寄せられないことがある。そうした現状は、学生の問題解決能力が十分に育成されていない結果であり、その能力を育成できるように、プレゼンテーションのフォーマットを開発した。そのフォーマットの活用で、発表者と聴衆のやり取りが的を射たものになり、活発な議論にまで発展することができる。具体的かつ触発的なプレゼンテーションの指導法であった。

3) 鳥居聖氏（桜美林学園経理部）による研究発表、「自己表現・評価トレーニングにおける新たな役割」

発表者の勤務する桜美林大学では、AO 選抜、推薦選抜等の方法により、一般入試に先立ってリベラルアーツ学群に合格し、入学することが決まっている高校生（既卒生を含む）に対して、入学前教育プログラムを実施している。このプログラムは、大学入学を控えた学生達が、大学での学び、大学生活をスムーズに始められるよう企画するものである。今回は、日常会話よりも文字による会話を多用すると言われている学生達に、会話を中心とした自己表現トレーニングを通して、仲間づくりや、人前で話すことの抵抗感をなくすことを目指した。参加学生が自身のコミュニケーション能力が低かったことを認識できたとともに、その能力の向上を数回のグループワークで確認できたことの報告があった。本報告者は教員ではなく、職員であることも特筆すべき点であり、このような桜美林大学の試みに、新しい大学教育の可能性を感じた。

4) 村上正行氏（京都外国語大学）による研究発表、「論理的な思考力の修得を目指した導入教育の授業設計・評価」

近年、日本においても大学における導入教育の重要性が大きく注目され、具体的な実践も数多く行われるようになった。導入教育では、主としてスタディスキルズを習得させることを目的にすることが多い。この目的に加えて、大学の特色を考慮した授業設計を行うことも大切である。発表者の京都外国語大学での導入教育「言語と平和」の授業の目的、授業設計についての報告及び実践後の授業評価アンケートの分析を行い、学生の学習効果や動機づけがどうだったかについても報告があった。本学の導入教育を担う人間学科目群においても活用でき、参考

になるようなFD活動実践であった。

5) 浅野幸子氏(大阪体育大学)による研究発表、「Concept learning と Planning を重視した英語指導」

大学の英語教育において、学生の英語基礎学力の向上や学力に合った指導を目指して、システムやカリキュラムの改善等様々な試みが行われている。発表者の体育系大学での英語学習困難者に共通して見られる原因やその問題をいかに克服していくかについて、外国語学習における認知行動の点から、Concept learning と Planning を重視した英語指導法(ゲームを中心とした演習が主)を考案し、それによる学習効果についての報告があった。この指導法のコンセプトが既に古いものである点を、発表者に告げた。

13:00~16:00

シンポジウムⅡ：「大学における「教育力」を考える—教員と職員のコラボレーションの視点から—」(三熊)

シンポジスト：浅野昭人氏(立命館大学)、今田晶子氏(立教大学)、長野佳恵氏(目白大学)、本郷優紀子氏(桜美林大学・本大会企画委員)

司会：佐々木一也氏(立教大学・本大会企画委員)

進学率の向上と学生たちの変化を受けて、大学における教育の形態や内容が多様化している。さらには、大学に対する社会からの期待や要請も加速度的に多様化しており、それらに対する大学側の機敏な対応が求められている。このような状況において、大学教育をその本来の目的を達成するような、より効果的なものとしていくにあたって、研究者としての大学教員の見識だけでは十分に対処しにくい課題が生起している。そこで、新しい授業形態の構想や企画、それらの実現のための学外機関との交渉や学生生活への支援、履修指導などの面では、職員が深く関わり、教員とは異なった側面からの様々なアプローチがなされている。このように職員が教員と協働し、現代の学生たちを対象にした大学における「教育力」を涵養することは、これからの日本の大学にとって必然的であるように思われる。

今回のシンポジウムでは、このような協働的営為を、職員の立場からすでに実践している私立大学関係者から、その経験に基づき、それぞれの大学での「教育力」の受け止められ方や、教員たちとの協働形態の実際、さらには、協働遂行に際して克服すべき課題などの点について率直な報告をいただき、教員と職員のコラボレーションという視点から大学における「教育力」を改めて問い直すとともに、その具現化の方法について各シンポジストからの実践報告があった。私立大学の職員がいかに大学教育に貢献しうる存在であるのかについて再確認する良い機会であった。

E. 参加しての所感

今回初めての参加となるが、特に「授業評価・成績評価」をテーマとする自由研究を中心に発表を聴く機会を得た。多くの大学が、教員の「教育力」を中心にして実際の取り組みを論じていく中で、各大学が共通に抱える問題点、困難点が存在していることが明らかになったように思う。それはたとえば「楽しい授業」と「力がつく授業」間の実質的乖離であり、成績評価の厳密さの問題

である。これらに関しては、本学での取り組みにそのまま移行させて考えることができ、きわめて有益であった。また、規模が大きく組織として余裕のある教育機関からの提案は、initiate 力のあるものとして興味深く捉えられる。このような形である程度のひな形が示されるということは、全く同等の取り組みを実現させるとはいかないまでも、追従することのできるイメージの共有につながり、少なくとも各所の事情に応じたオリジナルな実践を構築していく流れとなる。これは喜ぶべきことであり、本学としてもこれらの実践例から積極的にアイデア取り入れていけばよいのではと考えさせられた。（三熊祥文）

大学教育学会の参加は3回目であり、毎回時流にあわせたテーマを決めて開催されていることにこの学会の意義を感じている。今回のテーマは「大学の「教育力」とは何か」であった。高等教育のユニバーサル化の流れの中で、多様な学生に対応するために、各大学が個性化・特色化を進め、入学した学生の学びの内容や学習成果を保証することのために様々な努力を行っている。本研修の中でシンポジウムやラウンドテーブルに参加し、「大学の「教育力」とは何か」を問い直すことで、大学本来のあるべき姿を考えることの大切さに改めて気付かされ、また、今後のユニバーサル化に対応するため、教育において何を変え、残していかななくてはならないかを考えていくためのきっかけを与えられた。参加したワークショップにおいても、主としてFDの最新情報や運営方法について多くの知見を得ることができ、大学の教育力を向上させるための具体的な手法等に触れる機会となった。このことから、FDが単なる「授業改善」のためのものではなく、学生に確かな学習成果を保証できる学習活動を支えていくことを中心に据え、物心両面において、大学の教員及び職員が協働しながらのトータルな支援、すなわち、FDとSDの統合を目指すことが今後の主流となることがよく分かった。そうしたFDのめざましい進化及び深化のスピードに合わせるために、本学においても近々のうちに、FDのコンセプトを明確にするとともに、具体化していくための手順を全教職員の参加のもとで考えていかななくてはならないと感じた。（小西弘信）

（報告者：小西弘信、三熊祥文）